

農村女性としての自覚

牛 熊 田 鍋 静 枝

私は農業に従事するようになつてから丸二年になりました。それまでは、のんびりしていた私も二年間実際に体験して、自分だけではどうすることもできない農業のむづかしさや厳しさをしみじみと感じさせられました。

野菜一つを作るにしても、病害虫、除草等の農業について多少でも知識がなければなりません。植物を育てるのに最も基礎的な土壌と肥料、或は温度等についても、よく知っていなければ、良い物は作れないと思います。

また農業は他産業にくらべて、自分達の作った作物を農民自身で価格を決めることができません。しかも皮肉なことに、生産者価格が安く、消費者価格が高いのです。このような世の中の矛盾を、私達はどうすることもできないのです。

現在の農業はあまりにも多くの問題をかかえています。それらを一つ一つ掘り下げて考えてみますと、すべて政治につながっているのです。私は、政治のことを詳しく知りません。でも自分なりに

新聞や本を読んだりして、少しずつでも努力することを惜しまないつもりです。政治にうといからと言ってすまされるものではないと思うからです。又、農村の男女関係について考えてみますと、今までの農村では、女性は男性に依存して生活してきたように思われていますが、それは単なる錯覚であつて、むしろ男性は女性から意志の自由を奪い取つて主体性のない意志の弱い女性を男性自身がつくり上げてしまったのです。そのような束縛から女性のがれることができなかったのだと思います。すべて夫に服従してきた昔のお母さん達の歴史を見る時、私は何か割り切れなものを感ずるのです。

私達女性も男性と変わりなく、作物の作り方や、家畜の飼ひ方、或いは農機具等についての話ができれば、仕事ができたらどんなに毎日の生活に生きがいを感じて楽しくなることでしょうか。

男性でも女性でも、人間であるならば誰もが生活の向上に限らず、精神の向上も望むのが普通ではないでしょう

か。また私はそれが自然だと思ひます。

昔の農村婦人の歩んできた醜い道は二度とくり返したくありません。いくら男性中心の社会でも、これからは女性の力も必要になってきたのではないのでしょうか。

私達女性も本当は意志の自由が欲しいのです。一個の人間として主体性のある生き方をしたいのです。本当は、男性自身もそれを望んでいるのではないのでしょうか。

生活の中からの歴史観

屋形荒場 伊藤 一 男

今では、かつての穏やかさや、長閑さがなくなつてしまつた農村。農業は更に、私達には想像もつかない厳しい状態に立たされるかも知れませぬ。これからは農民こそあらゆる面で勉強することを要求されているのです。だから私達農村女性も男性ばかりに寄りかからないで少しだけでも、一生懸命努力し立ち上つていかなければならないのだと思ひます。

一、郷土史研究の体験から

高校生のころ、ぼくは坂田の城山によく登つた。城主の井田一族の盛衰史を調査しはじめたのは、中学二年の時である。その調査がかなりの成果をあげ、毎日毎日ふるい文献をたよりに城跡を歩き廻つていた。あれから七年になつた。その間、坂田城の調査研究も完成し、町には史談会が組織され、町史編さんのプランもすすんでいふ。七年の歩みの中で、痛切に感じたのは歴史的な遺構の荒廃と、一般の方々への「それを守ろう」とする歴史観念の喪失であつた。横芝町の北部にある三ヶ所の城跡や無数の古墳は、草

や樹に埋もれ、あるいは崩されていふ。また文献類は散失しやすく、家屋の新築などで貴重なものが日ごとに失われつつある。こうした現状に対して、ある人は「時代だなあ」と嘆き、ある者は「万事は金の世の中さ」と割りきつて、ぼくは決して嘆きはしない。安易な分別もしない。やはり現在の自分の生活も、歴史の一時点なんだなあという確認のもとに、郷土の歴史をみつめたい。

「歴史」それも草ぶかい郷土史の研究に、金銭的な利益はない。城跡や古墳や古文書は価値の再生産はしない。しかし、歴史は人間の精神的な

支柱として、明日をひらく為の大きな条件となる(郷土愛とか民族的な自覚など)高度に、複雑に発展した現代では経済合理主義の中で、ぼくらの人間性や個性は失われてきている。社会科学や哲学、芸術などは、失われたものを復権するための材料だと、ぼくは思う。歴史もそのために学ぶのである。先輩の歩んだ筋道をさぐり、その中に教訓を求め地域の発展の糧とする。そこにぼくら郷土史家の任務があると思う。農村から青年が流出し、地域が過疎となり崩壊してゆく現在、ぼくらは郷土の伝統というものを、どう継承していくべきなのか

二、土着的な歴史観を

そうした目的意識をもって七年間やってきた。しかし、坂田城の調査や古墳の発掘からは、生活に根ざした成果は得られなかった。井田氏の歴史に、農民や漁民の歴史はない。古墳の調査には生産点に迫る成果がなかった。

現在は城跡や古墳より、古い農機具や伝統芸能に興味がある。それは「庶民こそ歴史の主人公である」という歴史感が、ぼくの内部に育つていふ証しである。二、〇〇〇年に及ぶ日本の歴史、それは決して少数の英雄や富者が築いてきたのではない。野や山や海辺で、名もない多くの人々が自らの体を傷つけながら、血と汗を流しながら開いてきた。そうした人々の歩み

の中にこそ、ほんとうの歴史があると思う。そうした立場から、ぼくは今「千葉県の農業史」を学習し始めている。近代一〇〇年の歩みの中で大きな役割を果たしてきた農民の「生産」の意味を、農業技術の発展と農民の生産をまもりぬく運動の歴史を調査してみたい。

こうした土着的な歴史観が育たない限り、歴史的な財産や地域を守り発展させることはできない。

三、ひとつの提案

生活と生産点からの歴史観を育てる学習のひとつとして「母の歴史」の調査を提案したい。お母さんに、子供の頃から結婚を経て今日までの生活の様子を聞いてみる。そこにはきっと、一人の女性として、母として、人間として生きぬいてきたお母さんの姿を通して、当時の日本の歴史が鋭く浮きぼりにされると思ふ。是非やってみて欲しい。

歴史学習とは何百年もの事件をつめ込むことではない。どのような筋道によつて現在は建設されてきたのか。社会はどんな発展法則で変化してゆくのか。その中でぼくらはどんな役割を果たさなければならぬのか。歴史科学とは、そのことを生活と生産のかかわりあひの中で、実証的に究明してゆくものだ。その為に明日も時間をみつめて、調査をつづけてゆきたい。